

五雲会

二〇一九年五月十八日(土)

開演 十二時(正午)

開場 十一時

於 宝生能楽堂

演目の解説

能「俊成忠度」

(しゅんぜいただのり)

一ノ谷の戦いで平忠度を討つた岡部六弥太は、忠度が身に着けていた矢を見つ、辞世の歌が付けられていた矢を見つ、忠度の和歌の師である藤原俊成を訪ねて来ます。六弥太から矢を受け取った俊成がその歌を詠みあげ、忠度を懐かしみ、いたわしく思っている、忠度の霊が在りし姿で現れます。忠度は「千載集」に自分の歌を取り上げてもらったことへの感謝と、作者の名が詠み人知らずになつていくことへの恨みを告げますが、俊成に説得されて去って行きます。

狂言「千鳥」(ちどり)

主人に酒買いにやらされた太郎冠者、勘定がたまつているので簡単に酒をくれないうらうと、酒屋の主の話好きに取入つて酒樽を千鳥に見立てて「チリチリヤチリチリ」と千鳥を伏せる真似、津島祭の山鉦を引き廻す真似、流鏑馬(やぶさめ)で馬に乗る真似をしながら酒樽を奪つて逃げるのを主が追い込みます。

能「加茂物狂」(かもものぐるい)

三年ほど東国に出掛けていた男は、都が恋しくなり帰つて来ます。折から葵祭の最中、賀茂の明神に参詣すると、葵を笹に付けた狂女に出会います。昔、藤原実方が舞を舞つた橋本の社に想いを寄せた女は笹を捨て烏帽子と長絹を着ると、夫を尋ねて東国に旅をした様を舞います。男はその様子を見ている内に、この女が都に残して来た妻であることに気づきますが、人目もあることと思ひ、妻も自分に気づくのを待つて、かつて二人が住んだ五条の家に帰つて行きます。

能「石橋」(しやつきょう)

大江定基は出家して寂昭法師と名乗り、唐に渡り清涼山に至り、文殊の浄土へ懸かる石橋のもとに着きます。そこに通るかかった樵童は、寂昭が渡ろうとするのを止め、橋の謂われを語り、渡ることの困難さを示し、やがて奇端を見ることになるだろう、暫くここで待てと告げて去つて行きます。すると荘厳な音楽が始まり、文殊菩薩の霊獣である獅子が現れ、豪快に獅子舞を舞います。

12:00

俊成忠度

トモ上野 能寛
俊成 亀井 雄二
シテ 金井 賢郎

ワキ 梅村 昌功

大鼓 亀井 洋佑
小鼓 田邊 恭資
笛 杉 信太朗

後見

金井 雄資
山内 崇生

地謡

木谷 哲也
今井 基
金野 泰大
辰巳 大二郎
澤田 宏司
小倉 伸二郎
高橋 憲正
藪 克徳

12:35

千鳥

大藏 教義

大藏 吉次郎
宮本 昇

13:15

加茂物狂

シテ 佐野 玄宜

ワキ 宝生 欣哉

大鼓 高野 彰
小鼓 森 貴史
笛 成田 寛人

ワキツレ 吉田 祐一

後見

東川 光夫
小倉 健太郎

地謡

藤井 秋雅
川瀬 隆士
佐野 弘宜
當山 淳司
大友 孝史
武田 順
金森 秀祥
水上 優

へ 休憩 十五分 へ

14:45

石橋

ツレ 辰巳 和磨
シテ 金森 良充

ワキ 福王 和幸

大鼓 原岡 一之
小鼓 鳥山 直也
太鼓 林 雄一郎
笛 栗林 祐輔

後見

宝生 和英
東川 尚史
内藤 飛能
川瀬 隆士

地謡

朝倉 大輔
田崎 甫
金森 隆晋
和久 莊太郎
野月 俊樹
朝倉 登
佐野 晋也
小林 晋也

次回予告

二〇一九年六月十五日(土) 正午 始

加茂 金森 隆晋

小袖 曾我 内藤 飛能

鶺鴒 飼 澤田 宏司

終演予定 十五時四十分頃